

親こそ最良の教師

心身障害児を甦らせた漢字教育の実際

まえがき

三年前、グリーンアロー出版社から『石井式漢字教育革命』が刊行されますと、脳障害児をもった親御さんたちから、いろいろと相談を受けることが多くなりました。それは、その本の中で『かなが一文字も覚えられなかった脳障害児が、漢字をほとんど覚え、それにより、精神面、身体面でいろいろとすばらしい成長があった』ことを私が述べていたからです。

従来、脳障害というと、教育の力ではどうすることもできないもののように思われていました。ところが、『脳障害児でも文字が覚えられること』そして、『文字を覚え、書物を読むこと』によって脳の働きが良くなり、秀才にもなれる可能性が十分にあること』が、アメリカのグレン・ドーマン博士によって発表され、私もそれと同じ方法で実践

し、同じ結果を得ました。

しかし、残念なことに、わが国の障害児教育に当たっている教師たちは、このことを知りません。だから、脳障害児には漢字など絶対に覚えられないものと決め込んでいます。従って、脳障害児がその脳を使うことをしないものですから、せっかく良くなる可能性のあるのに、良くなれないのです(脳は使って初めてよくなるのであって使わなければ決して良くならないのです)。

このことは、第四章の『山田典吾監督との対談』の中でも述べられています。日教組の教師たちが、『精薄児に“危険”などという漢字が覚えられるはずがない。あれは作り事だ』と言って、この事実を信じようとしませんが、よくこのことを示していると思います。

もう一年半ほど前のことになりましたが、東京大学で神経心理学を学ぶかたわら、聴覚障害児の教育に当たっているアメリカの一女性が、私を訪ねて来言いました。『聴覚障害児がかなを覚えることは大別むずかしいことですが、漢字だと容易に覚えられます。ところが、この子供たちの使う教科書は、かなばかりで書かれていて、そのため子供たちは大層学習に苦しんでいます。文部省は石井先生の言うことがどうしてわからないのでしょうか』そう言って嘆いていました。

だれにも言えることですが、とりわけ教師は固定観念にとらわれて、新しい意見を受け入れることはできないものようです。教師は信念が固くなければ、とても他人を教育することなどできない訳ですから、それは当然と言えば当然のことかも知れませんが。

その点、教育の専門家でないお母さんがたは、固定観念に縛られることが余りないせいか、従来の教育の欠点を改めることや、新しい教育を受け入れることに素直です。こ

れもまた当然と言えば当然のことなのでしょう。

さて、誤った教育を続けていても、そのために被害のあるのは子供たちとその親で、日教組や文部省や先生たちには、何の被害もありません。それで、のんきでいられるのかも知れません。しかし、それでは困るのです。

脳障害児を救うために大変な犠牲を払って懸命の努力をしてきたグレン・ドーマン博士は、『親こそ最良の医師』という書物を著わして、親の努力とその効果の偉大なことを世に訴え、それを期待しています。それは、親が最もわが子の向上を願っており、最も辛抱強く実践できるからです。

私も、多くの親御さんたちから、前の本よりもっと詳しいものがほしいと求められ、その希望に答えたいと思い、この本の著述を決心しました。ここに紹介する方法は、実際に脳障害児を持つ親たちにより実践され、効果があつたものです。

しかも、心から子供を良くしたいという気持さえ強くあれば、教育については全くの素人でもやさしく実践でき、かつ著しい効果が得られる方法だと確信しています。

それで、ドーマン博士の著書にならって、『親こそ最良の教師』と名づけることにしました。本書がお役に立ちますようにと、祈つてやみません。

昭和五十五年九月

石井勲

追記 本書は『石井式漢字教育革命』の後編とも言うべきもので、実践に当たっては、ぜひそれからお読み頂く必要があることを申し添えます。本書では実践上必要な事項でも、『石井式漢字教育革命』で述べた事項については重複を避け、割愛したからです。